



EL SALVADOR

学校名：千葉県立佐原高等学校

氏名：降矢 睦

〔担当教科：政治・経済〕

- 実践教科等：政治・経済
- 時間数：2 時間
- 対象生徒：高校 3 年生
- 対象人数：41 人

〔1〕単元名

「現代の国際政治と日本—南北問題—」

〔2〕単元の目的/目標（ESD の能力・態度）

- ・エルサルバドルという国を通じて、異文化理解を図る。（多様性）
- ・エルサルバドルと日本とのつながりから、国際社会全体における相互性に気付く。（相互性）
- ・開発途上国が抱える課題を通じて、今後の国際社会の在り方や自らの在り方生き方について考察する。（公平性・連携性）

〔3〕ESD（持続可能な社会づくり）の視点

多様性	相互性	有限性
公平性	連携性	責任性

〔4〕単元の構成

時限	本時のねらい、テーマ	学習活動・学習内容	使用教材	評価の観点と方法
1	【開発途上国の現状を知る】 ・エルサルバドルという国を通して、開発途上国の現状を知る。 ・ODA の仕組みと、その取組について学び、今後どのような活動が求められるかを考察する。	・既存の知識を活用しながら、エルサルバドルの地理的位置を確認する。 ・エルサルバドルの気候や文化、日本との共通点についてや、開発途上国としての特徴について知る。 ・日本のODA仕組みと、具体的活動内容を知り、今後のODAの在り方や開発協力の在り方について考察する。	・白地図 ・パワーポイント ・ワークシート	・ワークシートの記述内容 ・取り組みの様子
2	【開発途上国が抱える課題】 開発途上国が抱える課題の一つ、モノカルチャー経済を通して、開発途上国の現状と開発の在り方について考察する。	・コーヒーの原産国クイズから、日本と原産国とのつながりを把握する。 ・モノカルチャー経済の問題点と格差解消のための取り組みについて理解する。 ・前時の内容も踏まえて、開発の在り方について考察する。	・缶コーヒー ・コーヒー産地マップ ・パワーポイント ・ワークシート	・話し合いの様子 ・発言内容 ・ワークシートの記述内容

〔5〕授業の詳細

1 時限目：【開発途上国の現状を知る】

(1) 白地図からエルサルバドルを見つけよう。

グループごとに白地図を見て、エルサルバドルの位置を確認する。近隣諸国の国旗や主食などのヒントを出しながら、既存の知識で大まかな地域まで導きだす。生徒達は、今までの学習の成果から「中米」「中南米」であることは容易に導き出せる。

.....ココがポイント！

.....紹介する際の視点として、日本との共通点や近隣諸国、植民地時代の宗主国の影響など、多面性を意識させる。

(2)エルサルバドルの紹介

①開発途上国であるエルサルバドル

研修の趣旨を説明し、エルサルバドルが開発途上国の一つであることを確認する。また、開発途上国とは何か、分布図を用いて簡潔にその特徴を確認する。

②エルサルバドルの位置や気候の特徴、文化等を、スライドを使って紹介する。



③開発途上国としてのエルサルバドルを紹介し、そこから開発途上国が抱える課題について理解させる。



(ATMに並ぶ人々)



(散乱するビニールゴミ)



(紛争時の弾痕)

(3)日本のODA(政府開発援助)について

①JICAの役割とODAの現場を紹介。エルサルバドルで活躍する青年海外協力隊や専門家の方々の活動を紹介する。その際、活動の成果と今後の課題も紹介する。



②日本のODAの特徴

日本のODAの特徴について、具体的統計資料を用いて説明する。

(4)まとめ

エルサルバドルの現状を踏まえて、日本のODAの取り組みについて考えたことを記述する。

※スライドを見ながら気づいたことをワークシートに記入。(生徒記入内容の一部抜粋)

1. エルサルバドルと日本の共通点

火山国で資源に乏しい 自然災害が多い(台風、豪雨、地震など) 人口密度が高い 戦後の復興

勤勉な国民性 自然豊か 制服を着ている カルデラ湖が多い

2. エルサルバドルが抱える課題

治安の維持、出稼ぎによる人口流出 雇用 ゴミ処理 スラム街や森林伐採による二次災害
教育の遅れ 内戦からの復興 自然災害が多い 資源に乏しい 貧困

3. 日本のODAの取り組みについて

- ・経済発展を遂げた日本で専門の知識を持つ人間がこれから経済発展を遂げようとする国に赴き、技術・知識を伝え援助をすることはとても素晴らしいことであると思う。
- ・我々は今この国に暮らし、その生活が当たり前だと感じている。しかしながら、世界を見渡せばとても厳しい現状が広がっている。

- ・私達は私達自身の幸福を追求することはもちろんのこと、自らの視野を広げ、もっと多数の人（国籍、宗教に関わらず）の幸福を考えるべきである。
- ・ODAの活動がもっと広く認知され発展すると思う。
- ・ODAが様々な形で行われていることが分かった。
- ・積極的に支援しているのはいいが、それが現地の人同士の間で受け継がれていくには相当な時間がかかると思った。
- ・知らない国、初めての文化だったので興味を持った。
- ・日本の良いところがエルサルバドルのために役に立っていることを知り素晴らしいと思った。
- ・ただ物資を送るだけでなく、技術を伝えたり、組織を創設することで国の根本的な発展を目指しているんだと思った。



2 時限目：【開発途上国が抱える課題】

私達の生活に身近なコーヒーをテーマに、南北問題（南南問題）において、開発途上国が抱える課題を考察させることをねらいとした。

（1）コーヒー豆の原産国クイズ

①まず、缶コーヒーに表示されている「厳選5カ国」に注目し、各班ごとにコーヒー豆の輸入先を予想させた。ヒントとして、世界のコーヒー産地が示されている地図を配布した。予想内容を発表し、実際の原産国との比較を行った。

ココがポイント！

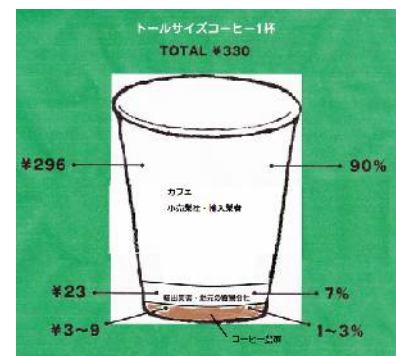
身近なものから、南北問題を考えさせる。
生徒の生活に引きつけて考えさせることで、具体的に行動するきっかけにつなげる。

②資料として、「世界の国別コーヒー消費量」を示し、日本はコーヒー消費量が世界第4位、輸入量は世界第3位のコーヒー消費・輸入大国であることを確認する。また、「厳選5カ国」に加えて、日本の主なコーヒー豆輸入国を紹介。その分布を確認する。

（2）公平な取引をめざして

①モノカルチャー経済とは？

開発途上国が抱える課題の一つ、モノカルチャー経済について取り上げる。『おいしいコーヒーの真実』を教材とし、私たちがいつも飲んでいるコーヒー一杯の値段から、貿易によって生じる格差の問題に触れる。ブラジルやコロンビアのコーヒー、ガーナの 카카오、チリの銅など、輸出向け一次産品に依存している産業構造は、輸入国の経済変動や気候変動等の影響を受けやすく、安定して外貨が獲得できない。（資料：コーヒー豆価格の推移）また輸出用農産物を主に生産するため、国内向けの食料生産が不足しがちで、開発途上国経済の自立を阻害する要因にもなっている。さらに、それら一次産品の流通過程では、流通業者や輸出入業者、小売業社によって利益が搾取され、農家にはほとんどの利益が行き届かないシステムが構築されている。このような現状を、DVDによる映像を用いて紹介する。



②公平な取引を実現する取り組み

「援助よりも貿易を」をスローガンに始まった、国連貿易開発会議 (UNCTAD) の活動を紹介。また、WTO の交渉の様子や先進国の取り組み、フェアトレード認証システムについて紹介する。

ココがポイント！

既存の知識と結びつけながら紹介する。
各種取り組みに対する評価は、様々な角度から客観的な視点で行う。



（3）まとめ

前時の内容も踏まえて、開発の在り方について、それぞれ考えたことを記入させる。

※生徒の感想・意見（一部抜粋）

- ・貧困をなくすためには、様々な組織の人々の協力が必要だと分かった。
- ・原産者の方々に、きちんと利益がいくようにするには、流通の仕組み自体変えていかなければならないと感じた。
- ・貿易がたくさん行われ、日本にも海外で生産されたものが多数流入しているが、相手国の現状や経済状況などは、私たちは知らない。輸入品を買い、消費する上で知る必要があると思った。
- ・さまざまな話題から感じる格差や貧困を少しでも改善できるように、自分のできることから考えて実行していきたい。
- ・英語の授業でも、「フェアトレードコーヒー」や「シェードグロウンコーヒー」について学んだが、現状は想像以上に苦しいことが分かった。

〔6〕児童・生徒の反応/変化

エルサルバドルという国自体が、生徒にとっては新しい出会いであり、興味を持って臨んでいた。日本から遠く離れたエルサルバドルが、「中米の日本」と呼ばれていることに驚いている様子だった。また、日常生活において、開発途上国について考える機会がほとんどなく、その現状を目の当たりにしたことで、新たに考えさせられるものがあったようだ。生徒の中には、自分の生活と結びつけて考える者もいて、自らの生き方を問い直す姿勢も見られた。多くの生徒が、開発協力には前向きな意見を述べていた。しかし、その難しさも感じているようだった。

〔7〕授業実践の成果と課題

今回の授業実践は、国際社会について学んでいくにあたっての導入として実施した。直接現地で手に入れた教材を使用したことで、より具体的でメッセージ性の強い内容となった。生徒は新しい国、新しい文化を知ること、国際社会に対する興味が沸いたようだった。また、開発途上国の現状を知ること、国際社会が抱える課題に対する問題意識が芽生えたようだ。しかし、今回の実践では、開発について生徒により具体的に考えさせる機会を設ける事ができなかった。生徒の中には、自分ができることは何か、今後国際社会はどうあるべきかを主体的に考えようとしている者もいたが、彼らの思考を深めるまでには至らなかった。したがって、その後の学習内容と今回の授業内容を結びつけながら、さらに生徒の学びを深めていきたい。

〔8〕参考文献（引用文献・参考資料）

- ・『おいしいコーヒーの経済論「キリマンジャロ」の苦い現実』辻村英之著（太田出版）2009 年
- ・『フェアトレードのおかしな真実』コナー・ウッドマン著、松本裕訳（英治出版）2013 年
- ・『エルサルバドルを学ぶための 55 章』細野昭雄、田中高著編著（明石書店）2010 年
- ・『格差の世界地図』岸上 伸啓（翻訳）（丸善出版）2012 年
- ・『おいしいコーヒーの真実』DVD、マーク・フランシス、ニック・フランシス監督、2006 年
- ・社団法人全日本コーヒー協会HP

〔9〕使用教材（写真／図などの実物）

上記参照。

〔10〕教師海外研修を終えて（感想・今後の展望）

今回の研修では、生きた教材を得ることが一番の目的であった。経験を通して、今まで自分がいかに他者が切り取った情報に頼り切っていたかということに気付かされた。直接現地に赴き得た情報は、人々の感情が反映された、より複雑で脆いものだった。そのような情報を、他者の目を通してではなく、自分自身の目で直接確認することの意義を改めて感じた。

また、研修のもう一つの目的は、教師である自分自身の視野を広げることにあつた。新たな出会いを通じて、様々な価値観や文化に触れることで見えてくるものも多い。今回は、国際協力の現場における相互理解の重要性や、グローバル社会に適応する人材育成の必要性に改めて気づかされた。

このような、研修を通じて得られた情報や気づきを、今後さらに発展させ、授業に生かしていきたい。

そして、今回をきっかけとして、また新たな学びの機会を作っていきたい。